



Title	内部移動を基盤とする日本語複合動詞の多義性とその認知的メカニズム：「V1+入れる/込む/詰める」の場合
Author(s)	蘇, 晓笛
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101528
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(蘇曉笛)	
論文題名	内部移動を基盤とする日本語複合動詞の多義性とその認知的メカニズム:「V1+入れる/込む/詰める」の場合
論文内容の要旨	
<p>本論文は、日本語の語彙的複合動詞「V1+入れる/込む/詰める」を考察対象とし、「内部移動」を基盤とするこれらの複合動詞の多義性形成プロセスおよび意味形成の認知的メカニズムを体系的な枠組みで統一的に説明することを目的としている。特に、日本語母語話者が「内部移動」という事象をどのように認知し、理解しているのかを明らかにすることを目指す。</p> <p>第1章では、本研究の導入として、研究対象の特徴、目的、考察に使用したデータベースについて述べた。</p> <p>第2章では、本論文の考察対象に関する先行研究を概観した。「V1+入れる/込む」に関する研究としては、意味の詳細な分類を行う記述的研究や、語彙概念構造、コア図式、主体化、イメージ・スキーマといった多様なアプローチによる多義構造のメカニズム解明を試みた研究を取り上げた。また、「詰める」および「V1+詰める」に関しては、壁塗り交替の視点を用いた意味分析に焦点を当てた研究を紹介した。しかしながら、「V1+入れる/込む/詰める」に共通する多義構造の特徴や相違点に注目し、統一的な認知原理に基づいて包括的に考察する研究は見当たらない。また、先行研究の多くが慣習化された表現に限って議論を進めている点も課題として指摘される。本研究は、慣習化されていない複合動詞にも着目し、複合動詞の結合が容認されるか否かの判断が、使用基盤的な要素に依存していることを強調し、「多義性」(polysemy)、「類義性」(synonymy)、そして「創造性」(creativity)の3つの視点から、以下の6つの問い合わせを立てた。</p> <ul style="list-style-type: none"> (a) 「V1+入れる/込む/詰める」に対応する本動詞の意味的特徴を確認する。 (b) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義を認定し、各意味におけるV1とV2の意味関係、および前項動詞の意味特徴を明らかにする。 (c) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義の間の水平的な意味の関連性、および意味拡張の認知的メカニズムを明らかにする。また、各意味が共通するスーパースキーマスキーマ的な意味を認定し、垂直的な意味の関連性を解明する。最後に、「V1+入れる/込む/詰める」それぞれの意味カテゴリーを、「横の関係」および「縦の関係」を含む構文的多義ネットワークとして図示する。 (d) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義に着目し、共通して結合するV1と、いずれか一方にしか結合しないV1の意味的特徴を分析することで、「V1+入れる/込む/詰める」の多義形成における共通点と相違点を明確にし、それぞれ結合制約を検討する。 (e) 辞書やデータベースには掲載されていないものの、実際の日本語話者の談話場面で使用されている用例に注目し、その使用を可能にする談話上のコンテクストを分析する。そして、前項動詞と後項動詞の間に生じる不整合性はどのように解消されているのかを解明する。「V1+入れる/込む/詰める」の慣習化されるまでの動的な側面、とそれらの生産性の違いを示す。 (f) 「V1+入れる/込む/詰める」の使用実態に基づき、ヒット数が多い語例からヒット数が比較的に少ない語例、さらに実際の用例が観察されない語例を提示することで、「V+入れる/込む/詰める」の容認性が段階的なものであることを主張する。複合動詞の意味形成、および、言語使用の創造性を反映するカテゴリー化の動的な側面を示す。 <p>第3章では、課題解決する際に援用する理論的枠組みとして、本論文で最も重要な概念である「イメージ・スキーマ」、および、「コンストラクション形態論」を導入した。まず、「V+入れる/込む/詰める」の多義性や意味形成の認知的メカニズムを体系的に説明するために、それらに共通する身体的・経験的基盤として、<容器>や<起点-経路-着点>をはじめとする「内部移動」事象に関連するイメージ・スキーマのネットワークを提示した。また、これら複合動詞の多義構造や生産性の動的側面を捉るために、意味カテゴリーを階層的な構文ネットワークとして扱う利点を示した。さらに、コンストラクション形態論に基づく使用基盤的な言語觀を採用し、頻度や構文スキーマの定着度が「V1+入れる/込む/詰める」の意味形成や言語使用における創造性へ与える影響を論じた。</p>	

第4章～第6章は、本論文の考察部分に当たり、「V1+入れる/込む/詰める」の「多義性」(polysemy)、「類義性」(synonymy)、そして「創造性」(creativity)をめぐる課題を順に取り上げて考察した。

第4章では、これら複合動詞の多義性について、個別に詳細な分析を行った。[V1-入れる]のコンストラクション的イディオムとして、基本義:[V1-入れる]_{MOTION-P} ↔ [あるものを何らかの形である物理的空间の内部に移動させる]、拡張義:[V1-入れる]_{MOTION-A} ↔ [あるものを何らかの形である抽象的空间の内部に移動させる]の2つを提示した。その多義性は、<容器>のイメージ・スキーマの空间的侧面、および、<起点-経路-着点>、<経路尺度>のイメージ・スキーマを基盤とし、物理的空间から抽象的空间へのメタファー的写像によって動機づけられている。

また、[V1-込む]のコンストラクション的イディオムとして、基本義[V1-込む]_{MOTION} ↔ [E1の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]、拡張義I[V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1を十分に行う]、拡張義II[V1-込む]_{STATE} ↔ [E1の程度が激しい・深い]の3つを提示した。この3つは、それぞれ異なる形の<満/空>のイメージ・スキーマを喚起しており、「濃密状態」の3つの実現形式として捉えられることを示した。[V1-込む]の基本義における「内部移動」は、[V1-入れる]とは異なり、物理的移動に限らず、概念話者の主観的把握に基づく複雑かつ多様な形態を持つことを確認した。さらに、基本義に含まれる「固着する」という結果状態が、<容器>のイメージ・スキーマの機能的侧面の顕在化に由来することを示した。

最後に、[V1-詰める]のコンストラクション的イディオムとして、基本義[V1-詰める]_{MOTION1} ↔ [E1をすることで、モノがある空间の限界まで隙間なく入る]、拡張義I[V1-詰める]_{MOTION2} ↔ [ある场所の限界までE1をする]、拡張義II[V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状态の限界までE1をする]の3つを提示した。この3つには、それぞれ<容器>の容量(基本義)、<経路>の終端(拡張義I)、<状態変化>の臨界点(拡張義II)といった多様な「限界」が描き出されている。

このように、「V1+入れる/込む/詰める」は、いずれも内部移動事象を基盤とし、<容器>のイメージ・スキーマを共有しつつも、動詞ごとに独自の意味特徴や拡張のパターンを持つことが明らかとなった。また、これらの複合動詞の多義性形成には、<容器>、<満/空>、<中心-周辺>など、多様なイメージ・スキーマが複雑に関与していることが示唆された。

第5章では、「V1+入れる/込む/詰める」を[+内部移動]、[-内部移動]の2つのグループに分けて、結合するV1の異同に着目し、類義性をめぐる課題を取り上げた。具体的には、同じV1と結合する場合の意味上の差異、および、片方にのみ結合する場合の理由については、各複合動詞に喚起されるイメージ・スキーマの違いを基に解明した。まず、[V1-入れる/込む/詰める]が「内部移動」を表す際の共通点と相違点を、(ア)物理的・抽象的領域間のメタファー写像の有無、(イ)「移動物」(TR)と「移動先」(LM)との関係性の差異、(ウ)[+内部移動]に伴う結果状態の差異、の3点から確認した。また、5つの結合パターンにおけるV1の意味的特性を分析することで、各複合動詞の結合制約を以下のように明らかにした。

[V1-入れる] :

- (a) 「移動物」と「移動先」は、【 $TR \neq LM$ 】という関係性を持ち、それぞれ独立した存在であることが求められる。
- (b) [V1-入れる]と同一のイメージ・スキーマを喚起する動詞は[V1-入れる]のV1として許容されにくい。

[V1-込む] :

- (a) <容器>のイメージ・スキーマの空間的・機能的側面が伴う性質に矛盾する動詞は、[V1-込む]のV1として許容されにくい。

[V1-詰める] :

- (a) 「移動物」と「移動先」は、【 $TR \neq LM$ 】という関係性を持ち、それぞれ独立した存在であることが求められる。
- (b) 「移動物」と「移動先」は物理的な概念領域に属する必要がある。
- (c) プラスの価値付与が伴う動詞は、[V1-詰める]のV1として許容されにくい。
- (d) <着点>、<容器>のイメージ・スキーマを喚起するV1が求められる。
- (e) <満/空>のイメージ・スキーマが喚起される文脈に矛盾する動詞が[V1-込む]のV1として許容されにくい。

また、[V1-込む]および[V1-詰める]の拡張義はいずれも<特性尺度>のイメージ・スキーマを喚起するため、類似した意味を共有していることが確認された。しかし、それぞれの意味形成には「濃密」と「限界」という異なる性質が関与している。このため、同じV1が生起する場合でも、いずれか一方でのみ用いられる文脈が観察される。さらに、異なるV1と結合する際には、V1自体の意味的特徴が結合の偏りをもたらす場合があること、また使用される文脈によって結合の容認度が左右される場合があることも明らかになった。[V1-込む/詰める]の拡張義の使用には、以下のような制約が存在することが示された。[V1-込む]の拡張義IはV1が「量的変化」を実現できる動詞であることを前提として活性化される。また、この場合、[E1を十分に行う]ことによって生じる「質的変化」には、「目的語自身の存在すべき状態の内部での状態変化」や、「動作主の技能や知識の上達という抽象的な領域への到達」といった条件を満

たすことが必要である。[V1-込む] の拡張義Ⅱを活性化させるには、E1が表す状態がその領域の内部へと深化しつつも、別の状態へ変化することを前提としないことが求められる。[V1-詰める] の拡張義Ⅱを活性化させるためには、[ある状態の限界までE1をする] ことで、動作主や目的語が本来の存在すべき状態の限界に達し、結果として異なる状態に変化することが前提となる必要がある。

第6章では、「V1+入れる/込む/詰める」の「創造性」について論じた。辞書やデータベースには掲載されていないものの、実際の日本語話者の談話場面で使用されている[V1-入れる/込む/詰める]の用例に注目し、その意味の不整合性が使用文脈によってどのように解消されるのかを分析した。分析の結果、[V1-入れる/込む/詰める]の動的な意味形成が、主に以下の3つの不整合性の解消によって促進されることが明らかになった。

- ① 「ランドマーク (LM) の性質の不整合性の解消」
- ② 「<容器>の<内部>の有り様の不整合性の解消」
- ③ 「<特性尺度>の不整合性の解消」

以上の分析から、具体的な使用文脈を適切に設定すれば、従来は容認されない語例は容認されやすくなることが確認された。これにより、[V1-入れる/込む/詰める]の容認性が段階的なものであることや、複合動詞の意味形成と言語使用の創造性を反映したカテゴリー化の動的な側面が示された。

第7章では、前章までの考察内容を総括し、結論と残された課題について述べた。

以上、本論文は、「内部移動事象」に関わるイメージ・スキーマのネットワークを共通基盤とし、日本語の語彙的複合動詞「V1+入れる/込む/詰める」の多義性、類義性、創造性に関わる諸課題を包括的に考察した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　(　蘇　曉笛　)		
	(職)	氏　名
論文審査担当者	主　查	教授　井元秀剛
	副　查	教授　田村幸誠
	副　查	准教授　小葉哲哉

論文審査の結果の要旨

蘇曉笛氏の博士論文『内部移動を基盤とする日本語複合動詞の多義性とその認知メカニズム：「V1+入れる/込む/詰める」の場合』は、内部移動を基本義とする複合動詞「V1+入れる/込む/詰める」の多義性形成のプロセス、意味合成のメカニズムの異同が生じる認知的動機づけを体系的な枠組みの中で統一的に説明することを目的とし、特に、これらの意味合成の根底に働いている身体的・経験的基盤などの認知的動機づけを明らかにすることで、それぞれの前項にくる動詞としては何が許容され、何が許容されないかを解明することを目指したものである。本論文は7章より構成されており、各章の概要は以下の通りである。

第1章の序論では、研究対象、研究目的、考察する際に使用するデータについて述べる。

第2章は、先行研究の概観と課題提示である。森田(1979)、姫野(1978, 1999)の記述的な研究や、由本(2013)、松田(2004)、金(2010)といった理論的な先行研究の成果と残された課題を明確にする。その上で「V1+入れる/込む/詰める」の意味に関する研究課題を、「多義性」(polysemy)、「類義性」(synonymy)、そして「創造性」(creativity)の3つの視点から提示することであるとしている。

第3章では、本研究が依拠する理論的枠組みを導入である。イメージ・スキーマの背景化、イメージ・スキーマ変換といった認知的操作を概観し、<容器>のイメージ・スキーマに関連する、<中心/周辺>、<満/空>、<遠/近>、<部分/全体>、<起点-経路-着点>、<尺度>といったイメージ・スキーマを取り上げ、これらのイメージ・スキーマが互いに関連し合い、1つのネットワークを形成できることを示している。さらに語レベルの意味と形式のペアリングをコンストラクションとして捉える理論、「コンストラクション形態論」(Construction Morphology)(Booij 2010)の基本的考え方を概説し、それに基づき、「V1+入れる/込む/詰める」もコンストラクションの一種として捉えられることを示し、「V1+入れる/込む/詰める」の意味カテゴリーの階層的構造を可視化する構文的多義ネットワークを提案している。

第4章から第6章では、「V1+入れる/込む/詰める」の「多義性」(polysemy)、「類義性」(synonymy)、そして「創造性」(creativity)をめぐる課題を順に取り上げている。

第4章では、それぞれの複合動詞ごとに詳細に検討し、その多義構造を検討する。まず、結合する前項動詞の意味的特徴に基づき、「V1+入れる/込む/詰める」の意味分類を行う。次に、各意味グループ間の水平的な関連性や意味拡張の認知的マカニズムを明らかにする。さらに、各複合動詞の本動詞と後項動詞との間の意味関係をもとに、各意味に共通するスキーマ的な意味を認定し、それぞれの意味カテゴリーを、「横の関係」および「縦の関係」を含む構文的多義ネットワークとして図示している。

第5章では、「類義性」に関する諸問題を取り上げる。これらの複合動詞は、いずれも「内部移動」を基盤としているが、各々の多義性形成のプロセスとして、「内部移動」という基本義を表す場合と派生義を表す場合に分けて、同じ前項動詞と結合する際に生じる意味的な類似点や相違点を詳細に分析する。そのうえで、これらの意味形成に働く認知的動機づけを、第4章で解明したイメージ・スキーマの前景化・背景化を用いて説明している。

第6章では、「創造性」について論じる。まず、Google検索のヒット数や日本語母語話者への言語調査を通じて、辞書に掲載されていないが実際には使用されている新規複合動詞を収集し、ヒット数が多い

語例から少ない語例、さらには実例が確認されない語例を比較する。新規複合動詞の使用を可能にするため、談話上のコンテクストがどのような役割を果たしているのかを明らかにし、「V1+入れる／込む／詰める」の容認性が段階的であることを示している。量的・質的データを用いて、新規表現がどのように創造され、使用され、そして慣習化されていくのかを実証的に検討することで、意味形成と創造性を反映するカテゴリー化の動的側面が浮き彫りになることが期待される。

第7章では、前章までの考察内容を総括し、結論と残された課題について述べている。

以上のように、蘇曉笛氏は、先行研究を詳細に検討した上で、これまで比較検討してきた「V1+入れる/込める」のみならず、「V1+詰める」も内部移動を基本とする動詞としてとりあげ、その意味拡張のプロセスを認知言語学的視点から明らかにした労作である。特にそれぞれの複合動詞のスーパースキーマを提示し、そこから基本義と拡張義、さらに拡張義間の意味関係を説得力のある図式で示したことは本研究の最大の成果である。[V1-入れる]について、スーパースキーマ：[V1-入れる] ↔ [あるモノを何らかの形である空間の内部に移動させる]、基本義：[V1-入れる]_{MOTION-P} ↔ [あるものを何らかの形である物理的空間の内部に移動させる]、拡張義：[V1-入れる]_{MOTION-A} ↔ [あるものを何らかの形である抽象的空间の内部に移動させる]、[V1-込む]について、スーパースキーマ：[V1-込む] ↔ [何らかの濃密状態になる]、基本義：[V1-込む]_{MOTION} ↔ [E1の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]、拡張義I：[V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1を十分に行う]、拡張義II：[V1-込む]_{STATE} ↔ [E1の程度が激しい・深い]、「濃密状態」の概念領域が基本義の空間から行為、状態へと拡張している。さらに[V1-詰める]について、スーパースキーマ：[V1-詰める] ↔ [何らかの限界に達する]、基本義：[V1-詰める]_{MOTION1} ↔ [E1をすることで、モノがある空間の限界まで隙間なく入る]、拡張義 I：[V1-詰める]_{MOTION2} ↔ [ある場所の限界までE1をする]、③拡張義II：[V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界までE1をする]とし、基本義が拡張されるにあたって、「移動先」は<容器>から<境界線>/<限界点>へ、「移動物」は「複数」から「単数」へ、「移動」は「+方向性」から「尺度」のある変化へと意味が拡がっているとまとめている。これらの意味ネットワークはどれも、対象を容器の内部に移動する、という基本図式をベースに視覚的にもわかりやすく図示されており、これらの図式により、これら複合動詞の数多くの用例や交替可能性に対して合理的な説明が可能になっている。

また、複合動詞の意味を表示した図式にあうような形で文脈を整えれば、これまで使えなかった表現でも容認可能性が高まるということをインターネット上の用例の確認やインフォーマントによるアンケート結果などから示している。加えて、例えば「語り込む」という周辺的な用例の意味や使用文脈を考察したうえで、「話し込む」という既存の複合動詞を参照することで成立したと指摘するなど、複合動詞の体系がどのように動的な発展しているのかに関する重要な指摘も行っている。このように単に容認性の可否を二律背反で決めてしまうのではなく、容認度の増加の要因をさぐり、創造性にまで章をたてて言及していることは賞賛に値するものと言えよう。

さらには、動詞の意味的な特性についてだけでなく、ランドマークとなる容器がトライエクターである移動の主体と独立して既に存在する($TR \neq LM$)のか、動作によって新たに形成される($TR \neq ?LM$)のか、あるいは主体そのものを容器として捉える($TR = LM$)のかという観点からも3つの複合動詞の意味を詳細に分析している。動詞の共起要素である着点句の意味的特徴を考察の有効な基準として提示したことは、日本語の移動表現の研究にも新たな観点を提起するものである点で、非常に興味深い。

公聴会では「詰める」の本動詞としての意味が地域によって違いがあるが、それをどう説明するのか、「思い込む」と「老け込む」を同列の意味効果として論じることの意味、「切り詰める」が必ずしも限界の図式にあてはまらないのではないか、といった個別の表現に関する処理に関する問題などのほか、類義語の比較において、意味ではなく形式によって分類しているのは適切ではないこと、基本的にLangackerの図式にあわせた書き方をしているのに、profileの表記がなされていないこと、などの問題点も指摘された。

しかしながら、本論文はこれまで明らかになっていた「V1+入れる/込める/詰める」の多義性形成のメカニズムを説得力のある形で提示し、創造性にまで考察をひろげ、これら複合動詞の意味に関して新しい知見を提案したということで、複合動詞一般の研究にも少なからぬ貢献をしていることは間違いない、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。